



〈雑録〉本邦會社制度ノ發達(1)

兒林, 百合松

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 15(3):474*-498

(Issue Date)

1913-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052093>



倚ラザルベカラズ、之レヲ實際ニ就テ看ルモ近來資本ノ増加著シク陰ニ工業放資ヲ爲ス銀行ノ多キニ至レルハ又此ノ傾向ヲ語レルモノニアラザルカ、我國ノ工業金融機關ニ關シテハ尙ホ論ズベキコト多クアレドモ問題外ニ奔ルヲ以テ他ノ研究ニ讓リ茲ニテ本論ヲ了ラントス。

本邦會社制度ノ發達 (其一)

商學士 兒林百合松

目次

- 前編 會社法施行前ノ會社
- 第一章 會社創設ノ事情
- 第二章 社政策ノ發達
 - 第一節 國立銀行ニ關スル會社制度
 - 第二節 取引所ニ關スル會社制度
 - 第三節 一般ノ會社ニ關スル政策

前編 會社法施行前ノ會社

第一章 會社創設ノ事情

一 會社制度ノ輸入 明治維新ハ政治上ノ改

革タルト同時ニ經濟上ノ一大革命タリ、從來封建專制ノ治下ニ於テ種々ナル干涉的法度ノ爲メニ束縛セラレ、曾テ自由ノ發展ヲ遂クルコト能ハザリシ商工業ハ、此時ヲ以テ煩瑣ナル干涉ノ羈絆ヲ脱シテ、自由競争ヲ基礎トスルコト、ナリ、産業發達ノ基礎漸ク完成セリ、殊ニ從來商工業ヲ賤視シタル氣風ニ反對シ、富國ノ道ハ商工業ノ隆昌ヲ圖ルニアル所以ヲ唱導スル者識者ノ間ニ現ハレ、斯クテ經濟界ハ將ニ眞面目ナル活動ノ期ニ入ラントセリ。

此時ニ當リテ最モ注意ヲ要スルハ、從來士族ノ階級ニ屬シタル者カ漸次經濟界ニ入りテ、新ニ生産事業ニ參加スルニ至レルコトナリ、彼等ハ舊式ノ事業ヲ營ムノ經驗ト手腕トニ於テハ從來ノ商工民ニ及バザリシト雖モ、新式ノ事業ヲ計畫シ之レヲ經營スルノ力量ニ至リテハ遙ニ一頭地ヲ擢ンデタルモノアリキ、或ハ銀行制度ノ輸入或ハ機械的工業ノ輸入或ハ海外貿易ノ發展

ノ如キ、孰レモ皆彼等ノ努力ニ負フ所頗ル大ナルモノアリ、然レドモ其最重要ナルモノハ個個ノ商工業ノ輸入ニアラズシテ、凡ソ一切ノ事業經營ノ大本タル會社制度ノ輸入ナリトス、實ニ今日ノ會社制度ハ其初メ維新時代ニ於テ歐米ニ行ハル、モノヲ輸入シ、之レヲ模倣シタルニ起ルモノニシテ、會社制度ノ基礎觀念タル「共同結社」ハ是等新進ノ生産民ニ取リテハ貴重ナル金科玉條タリシナリ。

元來「共同結社」トイフ事ハ衆民ノ意ヲ得易キ語ナリ、然レドモ會社組織ハ單純ナル共同結社ニアラズ、株式會社ハ殊ニ然リ、是ニ於テカ、初メ會社制度ヲ輸入スルニ當リテハ尙ホ未ダ各種會社ノ組織ヲ了解スルコト甚ダ不充分ニシテ、單ニ共同結社トイフ事ノ外、確タル智識ナキモノ頗ル多カリシガ如シ。

會社組織ノ輸入及ビ其普及ニ付イテハ、政府ノ獎勵ニ負フ所極メテ大ナリ、彼ノ爲替會社及ビ通商會社ノ創設ノ如キ亦其一半ノ目的ハ之レニヨリテ共同結社ノ模範ヲ示スニ在リタリトイ

フ、而シテ政府ハ結社事業ヲ普及セシムルニハ適當ナル會社法規ヲ制定スルノ必要アルヲ知りタリト雖モ、其事ノ到底急速ニ成功スベカラザルガ故ニ、「會社辨」及ビ「立會略則」ノ二書ヲ全國ニ頒布シテ共同結社ノ方法ヲ教ヘタリ、之レ實ニ明治四年ノ事ナリトス。

二 爲替會社及ビ通商會社 爲替會社及ビ通商會社ハ我國ニ於ケル會社の團體ノ先驅ヲ爲ス爲替會社ハ銀行類似ノ業ヲ營ミ併セテ紙幣ヲ發行シ、通商會社ハ之レニ附屬シテ商業ヲ營ムヲ目的トセルモノニシテ、其ニ政府ノ熱心ナル誘導輔掖ニ依リテ成リ、明治二年以來京、濱、阪、神等ノ各地ニ設立セラレ、數年ヲ出デズシテ解散シタルモノナリ。

是等ノ會社ハ會社の團體ノ先驅ヲ爲シタルニ止マリ、其組織及ビ經營ニ至リテハ今日ノ會社トハ大ナル差異アリ、一種ノ組合ニ過ギズ、今之レヲ東京爲替會社ニ付キテ述ベンニ會社ノ資

本金ハ社員ノ出資金及ビ政府ノ貸下金(貸下金ハ資本金ノ約半額ニ達ス)ヲ以テ之レニ充テ、社員ノ出資ニ對シテハ其金高ニ應ジ、利益金ノ三分ノ一ヲ配當スルノ外、尙ホ月一步ノ割合ヲ以テ利息ヲ附スルノ規定ヲ設ケタリシガ故ニ、社員ノ出資ハ配當付貸付金ニ外ナラザリシナリ而シテ會社ノ事務ヲ總管スル者ヲ總頭取トシ、總頭取ノ下ニアリテ事務ヲ管掌スル者十人宛ヲ選任シ、各一箇月ノ任期ヲ以テ交代シ、其任期中ニ爲シタル貸出金ニ付キテハ返済ニ至ル迄其月番ノ者ニ於テ之レヲ處理スルノ仕組ナリキ。

三 關西鐵道會社 茲ニ内外會社史上ニ異彩ヲ放テル一種特別ノ會社組織アリ、明治四年ノ關西鐵道會社即チ之レニシテ、公債ノ性質ヲ有スル株式ヲ以テ組織セル株式會社ナリキ、之レヲ歐洲ノ歴史ニ見ルニ、彼ノ株式會社ノ起源ト稱セラル、伊太利ノ公債權者組合ニ類似シタル所アリ。

關西鐵道會社ハ京都大阪間ニ敷設スベキ鐵道ノ建設資金七拾萬圓ヲ政府ニ供給シ、其供給資金ニ對シテ年一割ノ利息ヲ受ケ、且政府ハ資金供給ノ功勞ニ酬ユル爲メニ將來該鐵道ヨリ生ズル利益金ノ内二割ヲ會社ニ交付スルモノトセリサレバ株主ハ一定ノ利息ヲ受クルノ外、更ニ利益ノ配當ヲモ受クルコトヲ得ルノ制度ナリ、故ニ株主ハ會社ノ株主タルト同時ニ又間接ニハ公債權利者タリ。

初メ會社ヲ設立スルニ當リテハ、凡ソ五人ヲ以テ發起人ト爲シ、發起人全體ニテ七百株(七萬圓)ヲ引受ケ出金シ、他ニ相當ノ資産アルモノ凡ソ四十五人ヲ増募シ、是等ノ者ニ於テ二千八百株(貳拾八萬圓)ヲ引受ケ、其總計凡ソ五千人ヲ以テ會社仲間ト稱シ、資本金ノ半額參拾五萬圓ヲ出金シ其殘ノ半額ハ會社ヨリ之レヲ公衆ニ發賣シ、漸次一般ノ株主ヲ募集スルモノトス、而シテ會社ノ管理機關トシテハ一人ノ總頭取及

ビ五人ノ取締アリ、其ニ會社仲間ヨリ選任スルモノニシテ、前者ハ百株以上ヲ所持シ、後者ハ七十株以上ヲ所持スルコトヲ要ス、各株式（單ニ株トイフ）ノ金額ハ百圓及ビ五拾圓ノ二種トシ、株券（株手形トイフ）ハ債券ノ如ク利札付ニシテ、一般ノ株主ハ自由ニ之レガ賣買移轉ヲ爲スコトヲ得レドモ、會社仲間ノ者ハ其賣買及ビ質入ヲ爲スニハ、一々總頭取及ビ取締ノ承認ヲ得ザルベカラズ、平素ハ其所有スル株券ハ之レヲ會社ノ庫中ニ收容スルモノトセリ、斯クノ如ク株主ノ一半ハ仲間トシテ特別ノ責任ヲ負ヒテ會社ノ信用ノ基礎ヲ爲シ、他ノ一半ノ株主ハ何等ノ束縛ヲ受ケズ從テ會社ノ信用ニ關係ヲ有セズ、此點ニ於テハ恰カモ今日ノ株式合資會社ノ組織ニ酷似シタルモノアリ。

抑モ此鐵道會社ヲ設立スルニ至リシハ、政府が明治四年春京阪間ノ鐵道ヲ布設スルコトニ決定シタルニモ拘ハラズ、國費多端ニシテ其資金ヲ得ルニ途ナカリシ爲メ、京都市中ノ有

力者が私立會社ヲ起シテ資金ヲ供給セント企テ、同年九月遂ニ其設立ヲ許可セラレタルモノニシテ、其年十二月政府ハ右會社ノ規則ヲ各府縣ニ頒布シテ、一般株主ノ募集ニ便宜ヲ與ヘタル爲メ、間モナク全部賣盡スコトヲ得タリ、然ルニ政府ハ容易ニ工事ニ着手セス、却テ私立會社ノ參加ヲ歡迎セザル傾向ヲ生ジ、會社ノ爲メニ種々不利益ナル規定ヲ設クルニ至レリ、然ルニ時恰カモ京都地方一般ニ不景氣ノ時期ニ入り、之レガ爲メニ募集株金ノ拂込ヲ得ルコト困難ト爲ルヤ、政府ハ壹萬五千圓ヲ與ヘテ斷然解散ヲ命ジタリ、時ハ明治六年十二月末ナリキ。

四 東京銀行、江州會社及ビ其他ノ會社 維

新後ニ於テ、先ヅ最モ廣ク世ノ注意ヲ喚起シタルハ銀行業ニシテ、從テ銀行業ノ經營ニ所謂共同結社ノ組織ヲ採用セントスル者漸ク多ク、明治四年末以來各地方ニ其新設セラル、モノ前後相次グノ盛況ヲ呈シタリ、東京銀行ハ其一ニシテ政府ハ遂ニ其設立ヲ許可スルニ至ラザリシト雖モ、其會社組織ハ當時稍見ルベキモノニ屬セリ。今其大要ヲ述ベンニ此銀行ハ東京會議所ノ企ツル所ニシテ五萬株（一株百圓トス之レヲ販

賣株トイフ)ヲ公衆ニ發賣シ之レニ家業身元金及ビ官民共有金ヲ併セ總計七百萬圓ヲ以テ資本金トシ、販賣株ハ官吏、士族及ビ遠國ノ人ニシテ隨意ニ之レヲ買取ルコトヲ得ベク、其之レヲ買取ル際ニ、株金ノ五分ノ一即チ貳拾圓宛ヲ拂込ミ、殘額ハ銀行ニ於テ必要トスル場合ニ拾圓或ハ貳拾圓ヲ限リ、時宜ニ應ジテ出金スルモノトシ、株券(株金ノ證書トイフ)ハ一株毎ニ一通ヲ調製シ、之レガ賣買ハ所持人ノ自由トス、而シテ會社ノ經營ハ社長竝ニ取締役ニ於テ之レヲ執行シ、利益金ハ一部ヲ以テ積金トシ、他ヲ出資者ニ分賦シ、損失モ亦社中平等ニ負擔スルノ定メナリキ。

明治五年四月大津爲替會社ノ組織ヲ變更シテ江州會社ト稱シ、銀行業ヲ營マンコトヲ出願シテ許可セラレザリシモノアリキ、此計畫ニヨレバ資本金ヲ百萬圓トシ之レヲ本居金ト稱シテ、千兩株千株ニ分チ、出資者ハ別ニ其出資高ニ準

シテ屋敷、田畠、家、藏等ノ類自身ノ所有物ヲ保證トシテ縣廳へ差出スノ仕組ト爲シ、株主ニ特別ノ義務ヲ負ハシメタリ。

以上各項ニ於テ述べタル所ハ、會社制度輸入當初ニ於ケル會社の形體トシテ比較的注意スベキモノニ屬ス、組合的結社組織ハ此以外ニ於テモ尙ホ陸續各地ニ現ハレタリ。

第二章 會社政策ノ發達

會社ノ普及發達ヲ計ル爲メニ法律制定ノ必要アルコトハ、會社制度ノ輸入ト同時ニ既ニ識者ノ認ムル處ナリキ、然レドモ當時ノ狀態タルヤ未ダ會社ノ性質ヲ了解スルコト能ハザルノ有様ニシテ、從テ急速ニ完全ナル會社法典ヲ編纂スルガ如キハ到底不可能ノ事タリシナリ、殊ニ當時ノ所謂會社ト稱スルモノ、多クハ金融業ヲ營業ノ會社ニ關スルモノヨリ制定セラレ、他種ノ會社ニ對スル政策ハ漸ヲ以テ整頓スルコト、ナ

レリ。

第一節 國立銀行ニ關スル會社制度

一 國立銀行條例ノ制定(會社法規ノ濫觴株式會社ノ權輿) 政府ハ時勢ノ必要ニ迫ラレ、米國ノ制度ニ倣ヒテ、明治五年十一月ヲ以テ國立銀行條例及ビ國立銀行成規(細則ニ當ル)ヲ布告シ、株式會社組織ヲ以テ發行銀行ヲ設クルコトヲ許シ、其組織經營ノ準則ヲ明ニセリ、之レ我國ニ於ケル會社組織ニ關スル法規ノ初發ヲ爲スモノニシテ、又初メテ整頓セル株式會社制度ヲ樹立シタルモノナリ。

二 國立銀行ノ會社組織 國立銀行條例ニ現ハレタル株式會社組織ハ比較的進歩セルモノナリキ、唯其一ノ異點ハ之レニ法人格ヲ賦與スルノ規定ナカリシコトナリ、之レ當時未ダ法律思想普及セザリシニ依ルモノナリト雖モ、既ニ會社ガ訴訟、嘆願書、約定書、往復文書等ニ其社號ヲ用イ、社印ヲ押捺スルコトヲ認メラレ、而

シテ株主ノ責任ニ一定ノ限度ヲ認メタルニ於テハ、事實上獨立ノ人格ヲ有スルモノト見ルコトヲ得ベシ。

イ 設立 國立銀行ノ設立ニハ政府ノ免許ヲ必要トス、即チ先ヅ五人以上ノ者發起人ト爲リ創立願書ヲ政府ニ提出シ、政府之レヲ許可シテ會社創立證書竝ニ定款ヲ提出スベキコトヲ命ジタルトキハ、發起人ハ新聞紙、張紙其他ノ廣告ヲ爲シテ、廣ク株主ヲ募集シ、株金ヲ拂込マシメ、其滿株ト爲ルニ及ビ、一同ノ協議ニ依リテ創立證書及ビ定款ヲ認メ、且頭取及ビ取締役ヲ選任ス、其定款ハ今日ニ於ケルモノニ該當シ、創立證書ハ其拔書ニシテ、地方長官之レニ奧書ヲ爲ス、兩者共ニ株主ノ姓名ヲ列記シ、定款ニアリテハ各自ノ印章ヲモ押捺スルコトヲ必要トセリ、然レドモ株式ノ賣買ヲ禁セザル以上ハ設立當時ニ於ケル株主ノ記名調印ヲ求ムルハ無意味ナリトイハザルベカラズ、斯クテ政府ガ證書

及ビ定款ヲ承認シタル時ハ、開業免狀ヲ下附シ
茲ニ初メテ何々國立銀行ト公稱シテ、營業ヲ開
始スルコトヲ得ベク、同時ニ其旨ヲ少クトモ六
十日間世上ニ公告スルモノトス。

■ 管理ノ組織 國立銀行ノ管理ハ定款及ビ
申合規則ニ從ヒテ、頭取及ビ取締役之レヲ行フ
取締役ハ五人以上ニシテ其内一名ヲ以テ頭取ト
爲ス、共ニ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ之
レヲ選任シ、其内四分ノ三ハ銀行創立地ニ少ク
トモ一箇年間に在シタルモノタルコトヲ要ス、
又頭取取締役ハ就任ノ際忠實公平ニ事業ヲ取扱
ヒ、條例規則ニ悖戾セザルベキ旨ノ誓詞ヲ認メ
地方長官ノ奧書ヲ加ヘテ政府ニ提出セザルベカ
ラズ、國立銀行ニ於テハ未ダ常設ノ監查役ニ關
スル規定ヲ設ケズ、唯僅ニ申合規則ノ範例ニ於
テ、取締役中ヨリ時々一人ノ檢査役ヲ選任スベ
キコトヲ例示セルニ過ギズ、株主總會ニ關スル
規定モ未ダ極メテ不充分ニシテ、定時臨時ノ區

別明ナラズ、議事ノ如キ亦一定ノ通則ナカリキ
ハ 資本金ノ組織 國立銀行ノ資本金(元金
トイフ)ハ株金ニヨリテ構成シ、其一株ノ金額
ハ百圓ト定メ、未ダ百圓以下ノ株式ノ發行ヲ許
可セザリキ、而シテ株券ニ關シテハ何等ノ規定
ナク、株券ノ名稱スラ明ナラズ、申合規則ノ範
例ニ於テハ株手形ナル文字ヲ用キタレドモ、條
例ニ於テハ株式ト株券トヲ區別スルコトナク、
其雙方ヲ株又ハ株高ト稱シタリ、株券ハ孰レモ
記名式トス。

國立銀行ノ資本金額ニハ一定ノ制限アリ、人
口十萬人以上都會ノ地ニ於テハ五拾萬圓以上タ
ルベク、十萬人未滿一萬人以上ノ地ニ於テハ貳
拾萬圓以上タルベク、若夫レ一萬人未滿三千人
以上ノ地ナル場合ニ於テハ、政府ハ特ニ五萬圓
以上ノ資本金ヲ以テスルヲ許スコトアルベシト
定メ、資本金ノ増減ハ三分ノ二以上ノ株主ノ集
議ニ依リテ決シ政府ノ許可ヲ受クベキモノトセ

リ、而シテ資本金ノ拂込ハ一時ニ全額ヲ以テスルコトヲ要セズト雖モ、其分割拂込ノ方法ハ今日ニ於ケルト異ナリ、先ツ開業免狀ノ下附セラレ、以前ニ於テ少クトモ半額ヲ拂込ミ、他ノ半額ハ資本金ノ一割ヲ以テ月賦ト定メ、免許狀下附ノ翌月ヨリ順次ニ拂込ムベク、頭取支配人等ハ其月賦拂込ニ付キ誓詞ヲ立テ、政府ニ請合ハザルベカラズ、其第一回ノ拂込タルト月賦拂込タルトヲ論セズ、若シ株主ニシテ拂込ヲ怠ルトキハ、直ニ其株式ヲ競賣ニ付スルモノトス。

二 株主ノ權利義務 株主ハ本則トシテ、何レノ族籍何レノ職業ニアルヲ問ハズ、總テ其株高相當ノ權利ヲ有ス、即チ集會ノ議決ニ加ハリ一株ニ付キ一說宛ヲ出シ、利益ノ配當ニ預リ、殘餘財産ノ分配ヲ受クルコトヲ得ベシ、株式ノ賣買移轉ハ素ヨリ株主各個ノ自由ニシテ、銀行ノ元帳ニ其旨ノ記載アリタル時ヨリ其效力ヲ生ズルモノトス、株主平等ノ原則ニ對スル唯一ノ

例外ハ、當該銀行ノ支配人以下ノ職員タル株主ニシテ、彼等ハ自己ノ名義ニテ其株主トナルモ議決權ヲ行フコトヲ得ザルモノトセリ、而シテ今日ニ於テハ一旦拂込未済ノ株式ヲ所有シタルモノハ、假令讓渡ヲ爲シタル後ニ於テモ尙ホ多少ノ義務ヲ伴ヘリト雖モ、國立銀行ニ於テハ然ラズ、一旦讓渡ヲ爲シタルトキハ、最早何等ノ責任ヲ附帶セズ。

株主ノ責任ハ本則トシテ、株金ヲ以テ限度トスルモノニシテ、假令銀行ガ何程ノ損失ヲ醸シテ分散スルモ、株主ハ其株高ヲ失フノ外別ニ責任ヲ負フコトナシ、之レ株式會社組織ノ主眼トスル所ニシテ、實ニ我國ニ於ケル有限責任制度ノ嚆矢ナリ、然ルニ國立銀行條例ハ此外ニ別ニ一種ノ特則ヲ設ケ(一)發行紙幣兌換ノ事故(二)預リ金渡シ方ニ付キテノ事故又ハ(三)諸爲替手形、約定手形ヲ渡スニ付キテノ事故アル場合ニ於テハ、株主ハ各其株高ニ應ズル釀金ヲ爲シ、

以テ之レヲ承辦スベキ義務アルモノトセリ、尤モ之レハ唯一時的ノ立替金ニ過ギズシテ、銀行ノ都合次第其拂戻ヲ受クルモノナレドモ、既ニ斯クノ如キ附帶ノ責任アル以上ハ國立銀行ノ株主ハ一種ノ保證責任ヲ負ヘルモノトイフモ可ナラン。

ホ 計算 國立銀行ノ計算ハ毎年兩度ニ之レヲ行ヒ利益金ノ内少クトモ十分ノ一以上ヲ(資本金ノ二割ニ達スル迄)別段積金トシテ控除シ其殘餘ヲ以テ株高ニ應ジ、各株主ニ分配スルモノトス、而シテ頭取取締役ハ其利益配當ヲ爲サザル前ニ利益ノ正算ヲ株主一同ニ通知シ、同時ニ新聞紙ヲ以テ世上ニ公告シ、且其公告ノ日ヨリ十日以内ニ其計算書ヲ政府ニ提出スルコトヲ必要トス、然レドモ利益ノ配當ニ關シテハ、株主集會ノ決議ヲ經ルヲ必要トセズ、若夫レ損失ノ補填ヲ終ラザル間ノ配當禁止ニ關スル規定ハ今日ニ於ケルト同様ナリ。

三 明治九年ノ條例改正 明治五年ノ條例ニ於テハ紙幣ノ發行及ビ兌換ニ關スル規定嚴重ニ失シ、從テ國立銀行ノ新設少數ニシテ五指ヲ屈スルニ足ラザリシ爲メ、九年八月ニ至リ是等ノ制限ヲ寬ニスル爲メニ改正ヲ行ヒ、條例及ビ成規ノ全體ニ亘リテ大修正ヲ施シタリ、今之レヲ會社組織ニ關スル規定ニ就イテ見ルニ、大體ニ於テハ舊來ノ規定ヲ襲用シタリト雖モ資本金、總會、議決權、報告書ノ公告等ニ付キテハ、其政策ヲ改メ稍進歩ノ跡アリ。

イ 資本金 改正條例ノ規定ハ國立銀行ノ資本金額ノ制限ヲ寬大ニシ、人口拾萬人以上ノ地ニ於テハ貳拾萬圓以上、拾萬人以下ノ地ニ於テハ拾萬圓以上ヲ原則トシ、時宜ニ依リテハ五萬圓未滿ニテモ設立ヲ許可スルコトアルベシト改メ、同時ニ其一株ノ金額ニ付キテモ制限ヲ緩メ資本金拾萬圓以上ノ銀行ニアリテハ百圓又ハ五拾圓、五萬圓以上拾萬圓以内ノ銀行ニアリテハ

五拾圓又ハ貳拾五圓ト改メタリ。

■ 總會及ビ議決權 株主ノ總會ハ每年少クトモ二回召集シ、又別ニ臨時總會ヲ召集スルコトヲ得、總會ニ於ケル議決權ニ付キテハ相當ノ制限ヲ立ツルコトヲ必要トス、議決ノ方法ハ多數決ニ依ルヲ普通トスト雖モ定款ノ變更其他重大ナル事項ヲ定ムル場合ニハ、格段決議ノ方法ニ依ルベキモノトス、所謂格段決議ノ方法ハ今日ノ特別決議ニ該當スルモノナレドモ、稍其性質ヲ異ニスルモノアリ、即チ現今ノ特別決議ハ一定數ノ株式ヲ代表スル一定數ノ株主ノ出席アルヲ必要トシ、若シ其出席ナキ場合ニ於テハ假決議ヲ爲シ再ビ總會ヲ召集シテ決スルモノナレドモ、國立銀行ニ於ケル格段決議ハ、定足數ノ規定ヲ設ケズ、出席者ノ多少ニ拘ハラズ、其總員ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ以テ一旦大體ノ決議ヲ爲シ、後十四日以外一箇月以内ノ時日ニ於テ更ニ總會ヲ召集シテ、其出席株主ハ多數ノ意見

ニ依リテ確定スル方法ナリ、思フニ斯クノ如ク出席者ノ多少ニ拘ハラズ常ニ再應決議ヲ爲サシムルハ、決議ノ慎重ヲ期スル爲メナルベシト雖モ、多クノ場合ニ於テハ無用ノ手數ヲ重ヌルノ煩ニ耐エザルベシ、而カモ此格段決議ノ方法ハ爾來二十餘年間繼續シテ實行セラレタルナリ。

ハ 實際報告表ノ公示 國立銀行ニ對シテハ從來未ダ貸借對照表公告ノ規定ナカリシヲ、九年ノ改正ニ依リテ、新ニ半季實際報告表ヲ新聞紙其他ニテ世上ニ公告スベキ旨ノ命令規定ヲ加ヘタリ、此規定ハ同時ニ制定セラレタル米商會所條例ノ公告規定ト共ニ我國ニ於ケル貸借對照表公示ノ元祖ヲ爲スモノナリ。

二 模範定款ノ改善 改正國立銀行成規ニ依ル定款ノ文例ハ、之レヲ明治五年ノ夫レニ比照スルトキハ大ニ面目ヲ改メタルモノアリ、爾來明治三十年前後ニ至ル迄、百數十ノ國立銀行ノ組織經營ノ大綱ハ孰レモ範ヲ此定款ニ取リタル

モノニシテ、亦一顧ノ値ナキニアラズ。

第二節 取引所ニ關スル會社制度

一 株式取引條例ノ制定 明治ノ初メニ於ケル内外公債ノ發行ト國立銀行創設ニ伴フ株式賣買流行ノ希望トハ、政府ヲシテ株式取引條例制定ノ必要ヲ感ゼシメタリ、所謂株式取引條例ハ明治七年十月ノ發布ニ係ハリ、株式會社組織ヲ以テスル取引所ノ設立及ビ組織經營ヲ規定シタルモノニシテ、國立銀行條例ト共ニ我國最古ノ會社法規タルモノナリ。

二 株式條例ノ會社組織 株式條例ニ現ハレタル會社組織ノ規定ハ、大體ニ於テ國立銀行條例ニ依ルモノト相似タリト雖モ、有限責任ノ規定ヲ存セザリシハ其大ナル缺點ナリトス。

株式條例ノ規定ニヨリテ設立スルコトヲ得ル株式取引所ハ東京及ビ大阪ニ於テ各一箇ヲ限リトス、而シテ其設立ヲ爲スニハ政府ノ免許ヲ必要トス、即チ發起人五人以上連名シ、創立願書ヲ政府ニ提出ス、此願書ニハ資本金額及ビ入金スベキ株數、發起人ノ姓名、宿所等ヲ詳細ニ記載シ、地方官廳ノ奥

印ヲ受クルヲ必要トス、政府ガ創立ヲ許可シタルトキハ、發起人ハ官許ノ新聞紙又ハ其他ノ方法ニ依リテ直ニ之レヲ公ニシ株式書込ノ案内ヲ爲ス、此案内ニハ取引所定款ノ考案、資本金ノ總株數竝ニ發起人ヨリ入金スベキ株高ヲ明細ニ記載ス發起人總員ハ少クトモ總株數ノ三分ノ一ヲ引受ケザルベカラズ、株主ノ申込アリタルトキハ、發起人ハ株主ノ集會ヲ召集シ、投票ニヨリ三十株以上ヲ所有スル株主ノ中ヨリ假リニ五人以上ノ肝煎ヲ選任シ、肝煎ハ其内ヨリ更ニ二人ヲ選ヒテ假リニ之レヲ頭取及ビ副頭取ト爲シ、開業ニ要スル一切ノ手續ヲ爲シタル後ニテ、書類ヲ添ヘテ政府ニ届出デ、開業免狀ノ下附ヲ受ケタルトキハ、茲ニ初メテ營業ニ着手スルコトヲ得ベク其旨ヲ新聞紙ニ公告スルモノトス。

會社ノ管理ハ定款、申合規則等ノ規定ニ從ヒ肝煎之レヲ執行ス、肝煎ノ人員ハ十人以上二十人以上ノ偶數トシ、毎年二月一日ニ召集スル株主竝ニ社員(仲買人タイフ)ノ定式總會ニ於テ、其雙方ヨリ同數ヲ選出ス、頭取、副頭取ハ肝煎ニ於テ之レヲ互選ス、共ニ其任期ハ一箇年トシ、重任ヲ許ス、肝煎ハ毎月二ノ日及ビ七ノ日ヲ以テ集會定日トシ、毎月六回午前第十時ヨリ會議ヲ初メテ、定式事務又ハ臨時事務ヲ協議シ、肝煎半數以上ノ出席ヲ得テ、多數決ニ依リ之レヲ決ス、株主總會ニ關スル規定ハ甚不完全ナリシモ、大體ニ於テ之レヲ二種

トシ一ハ肝煎ノ選任ヲ爲ス爲メニ召集スルモノコシテ、一ハ營業ノ報告及ビ利益分配ニ關シテ召集スルモノナリ、株主ノ總會ニ於ケル議決權ハ一株ニ付キ一箇トシ、未タ之レガ制限ニ關スル規定ナシ。

資本金ハ株式ニ依リテ成リ、一株ノ金額ハ百圓トシ、株券(株手形トイフ)資本金額ノ制限及ビ分割拂込ニ關スル規定ヲ設ケザリキ。

株主ハ議決權ヲ行使シ、又利益ノ分配ニ與ルノ權利ヲ有ス然レドモ株券ノ賣渡又ハ質入ヲ爲スニハ一々肝煎ノ許可ヲ受クルコトヲ必要トシ、又其株式ヲ質入シタル株主ハ一切發言投票ノ權利ナク、肝煎ニ選舉セラル、コトヲ得ズ、又五株以上ノ株主ハ何時ニテモ取引所ノ社員ト爲リテ、諸公債株式證券等ノ賣買ヲ爲シ、又ハ其仲買ヲ爲スコトヲ得ベシトノ特例ヲ設ケタリ、株主ノ責任限度ニ關シテハ、未ダ何等ノ規定ヲ設ケザリシガ故ニ、此條例ニヨル株式會社ハ無限責任ナリト解スルチ至當トス。

會社ノ決算ハ毎年二回之レヲ行ヒ、總集會ニ於テ頭取支配人ヨリ半季商業ノ報告ヲ明細ニナシ、純益ヲ株數ニ割合ハセテ各株主ニ配當スルモノトス、而シテ利益ノ配當率ガ年一割ニ上ルトキハ肝煎ノ集會ヲ以テ割賦高ノ一部ヲ引去リ之レヲ會社ノ積立金ト爲スノ規定トス、配當ヲ先ニシ積立金ヲ後ニ

スルハ奇觀ナリ。

三 米穀相場會社ニモ適用ス 米穀取引所ノ事業ハ其沿革極メテ古ク、維新以後ニ於ケル會社の經營トシテモ、明治四年既ニ東京商社起リ七年中外商行社ノ新設アリ、其業務モ亦漸ク殷盛ナラントシ、米穀以外ノ商品モ亦定期取引ノ行ハレタルモノアリシガ、政府ハ明治七年十二月米油限月賣買ヲ禁止シ、同時ニ株式組織ヲ以テ米穀取引所(米穀賣買相場會社トイフ)ヲ設立スルコトヲ許可シ、其之レヲ設立スルニハ株式取引條例ノ規定ニ從ヒテ會社規則ヲ調製シ、地方廳ヲ經テ政府ニ出願シ、許可ヲ受クベキ旨ヲ布告セリ。

四 米穀相場會社創立準則ノ制定 明治七年ノ株式條例ハ簡單不完全ナリ、之レヲ米穀取引所ニ適用スルニ於テモ亦同様ノ嘆アリシヲ以テ遂ニ翌八年五月米穀相場會社創立準則ヲ制定發布スルニ至レリ、而シテ株式取引所設立ノ希望

者モ亦此規則ニ準シテ、創立證書竝ニ申合規則等ヲ設定シ、出願スルコトヲ得ルモノトシ、以テ株式條例ニ於テ不明瞭ナリシ點ヲ明瞭ナラシメタリ。

イ 創立證書及ビ申合規則 會社ヲ創立スルニ付キテハ、創立證書ヲ作成シ、地方官ノ承認ヲ受ケテ政府ニ之レヲ提出シ、其許可ヲ受クベキ事恰モ國立銀行ノ場合ニ於ケルガ如ク、而シテ創立證書ニハ必ズ申合規則(定款ニ當ル)ヲモ添附セザルベカラズ、其通數ハ孰レモ三通トシ、内一通ハ免許ノ與書ヲ爲シテ之レヲ會社ニ下附シ、以テ設立免許狀ト爲スナリ、又創立證書及ビ申合規則ニハ共ニ總株主ヲ表示スルコトヲ要シ、殊ニ後者ニアリテハ總株主ノ連署調印ヲ爲サルベカラズ。

ロ 會社ノ役員 今日ノ取締役ニ對應スベキ役員ハ頭取副頭取及ビ肝煎ノ三種アリ、肝煎ノ内ニハ又検査役タルベキ者ヲ置キ、此外必要ニ

應ジ、肝煎中ニ商議掛及ビ爲替掛ヲ置クコトヲ得、頭取及ビ副頭取ハ肝煎(最少限ヲ五人トス)ノ中二十株以上ヲ所有スル株主ヲ以テ之レヲ選任シ、頭取、副頭取、肝煎及ビ検査役ハ孰レモ就任ノ節、然ルベキ誓詞ヲ立テ、會社ノ爲メ抽籤盡力規則ヲ奉ジ制限ヲ守リ、毫モ詐僞輕忽等ノ舉動ナキ旨ヲ誓ハザルベカラズ、又此準則ニ於テハ會社ノ支配人、書記方、勘定方及ビ簿記方ノ如キモ亦株主中ヨリ之レヲ選任スルコトヲ必要トシ、唯會社ノ便宜ニ依リ支配人以外ノ者ハ之レヲ株主ナラザル者ヨリ任命スルコトヲ得ルモノトセリ。

検査役ハ肝煎ノ中ヨリ一人ヲ互選シテ之レニ任ズルモノニシテ、今日ノ監查役ニ該當スル重要ナル役員ナリ、國立銀行條例及ビ株式條例ニ於テハ、未ダ其規定ナカリシヲ、此ノ準則ニ至リテ初メテ設ケラレタル所ナリ、而シテ其検査役ノ職務ハ常ニ金錢ノ出納ヲ監シ、勘定ノ差引

ヲ檢シ、諸帳面締高等ノ正否ヲ點檢シ、併セテ會社商業ノ實況ヲ觀察シ、其非違ヲ指摘シ、前後ノ顛末ヲ取纏メ時々之レヲ頭取竝ニ肝煎及ビ株主一同ニ報告スル等ナリ。

會社ハ別ニ商議掛ヲ設クルコトヲ得ベク、商議掛ハ肝煎ノ内頭取ヲ除キタル殘餘ノ人員少クトモ三人以上ヲ以テ之レニ任ジ、毎月三回會議ヲ爲スコトヲ要ス、而シテ其職務ハ常ニ其營業事務上ニ於テ得失利害ヲ商量討論シ、及ビ凡百施設上ニ於テ之レガ順序ヲ立テ又ハ其議案ヲ草シ、之レヲ頭取ニ申陳シ、之レヲシテ施行セシメ、併セテ社中一般ヲ相手ニシ之レガ申込申立其他ヲ受付處分シ、及ビ違約人審判等ノ事ニ從フニアリ。

ハ 所謂社中ノ總會 總會ニ關スル規定ハ稍進歩シタルモノアリ、即チ肝煎選舉ヲ初メ、申合規則ノ加除改正等凡ソ會社一般ニ關係シ、其他重立チタル事件ハ須ラク社中ノ總會ヲ催シテ

決スベキモノトシ、總會ヲ分チテ定式臨時ノ二種ト爲シ、其事ノ緩急輕重等ヲ照ラシ、以テ各種ノ議事ヲ此二總會ニ分付スベク、定式總會ハ少クトモ一箇年一回ハ必ズ之レヲ催シテ金錢竝ニ勘定帳簿ノ展閱其他ニ從事スルモノトス、議事ハ出席者ノ多數ニ依リテ決シ、缺席者ハ委任狀ヲ利用スルコトヲ得ルナリ、而シテ唯茲ニ一ノ注意スベキハ此定式及ビ臨時ノ二總會ノ會員ハ單純ナル株主ノミニ止マラズシテ社員（仲買人）ヲモ包含スルコト之レナリ。

ニ 株主ノ權利義務 純然タル放資ノ目的ヲ以テ株式ヲ所有スルト稍異ナリテ、會社ノ目的トスル事業ニ多少ノ關係ヲ有スル者ノミヲ以テ株主トスルコトハ、株式會社ノ初期ニ於テ多ク見ルノ現象ニシテ、蓋シ組合思想ノ影響ニヨルモノナルベシ、前ノ株式條例ニ於テモ此傾向明ナルモノアリシガ、今此相場會社準則ノ如キハ、其最モ顯著ナル實例ヲ爲スモノナリ、換言スレ

バ株主ガ仲買人ト爲ルヲ以テ當然ノ通則ト看做シタルモノナリ、即チ其規定ニ曰ク

株主トハ此社ノ資本ニ向ヒ其金ヲ入レ、之レガ株券ヲ引請ケ以テ當社純益金ノ分配ニ預カルモノ、總名ナレドモ、若シ是等人員ノ内ニテ(中略)社員又ハ役員タラザルモノアレバ、須ラク(中略)右社員等ト稍其區別ヲ立置クベシ

而シテ此一般株主ハ只管營業ノ狀況ヲ傍視スルノ地位ニ在ルモノニシテ、其權利トシテ有スル所ハ利益ノ配當ニ預カルノ外、社中ノ總會ニ干與シ、人選竝ニ議事上ニ於テ若干發言投票ヲ爲スノ權利及ビ金錢竝ニ勘定帳簿ノ閱覽ヲ要求スルノ權利等之レナリ、株手形ノ讓渡及ビ質入ニ付キ肝煎ノ許可ヲ受クルヲ要スルハ株式條例ニ於ケルト同ジ。

ホ 資本金及ビ定數 創立準則ノ發布セラレタル翌月即チ明治八年六月更ニ該會社ノ資本金及ビ社數ニ關スル制限規定ヲ發布シ、之レニヨリテ會社ノ資本金最低限度ヲ參萬圓トシ、其設立許可ノ社數ハ東京ニ二箇所其他ノ府縣ニ各一

箇所宛トシタリ。

五 米商會所條例ノ制定 米穀取引所ニ關スル規定ハ、上述ノ如ク一方ニハ株式條例ヲ準用シ、他方ニハ相場會社準則ヲ適用シ、其間頗ル繁雜ナルモノアリシヲ、九年八月ニ至リ、新ニ米商會所條例及ビ其成規ノ制定セラル、ニ及ビ株式會社組織ノ米穀取引所ニ關スル規定ヲ統一セリ、此條例ハ爾來屢々改正増補ヲ行ハレテ明治二十六年ニ至ル迄繼續セリ。

米商會所條例ハ稍簡潔ニ從來ノ規定ヲ統一シタルモノニシテ、先ヅ發起人ノ人員ヲ十人以上ト改メ、其總員ノ引受クベキ株數ノ最低限度ヲ高メテ資本ノ半額ト爲シ、總會ニ關スル規定ヲ改良シテ株主ノミノ總會トシ、株主總會ハ毎年度或ハ數度例日ヲ定メテ之レヲ召集シ、主トシテ肝煎ノ選舉及ビ會社營業ノ實況計算ノ得失ヲ議スルモノトシ、臨時總會ハ肝煎ノ召集スルノミナラズ、五分ノ一以上ノ株數ヲ有スル株主

等モ其召集ヲ請求スルコトヲ得ルノ制度ヲ設ケ
十株以上ヲ有スル株主ノ議決權ニ制限ヲ設ケ又
株金ノ強制拂込規定ヲ明カニシ、且決算報告ヲ
世上ニ公告スベキコトヲ定ムル等進歩ノ跡見ル
ベキモノアリ、然レドモ其他ノ點ニ付イテハ尙
ホ舊態ヲ改ムルニ至ラズ、有限責任ニ關スル規
定ノ如キモ其後十二年二月ニ至リ株式取引所條
例ノ例ニ倣ヒテ初メテ之レヲ明ニセルノミ。

六 株式取引所條例ノ制定 株式取引所ニ關
スル規定モ當初未ダ營業上不利益ナル所少ナカ
ラズシテ、遂ニ其實用ヲ見ルニ至ラザリシヲ以
テ、十一年五月ニ至リ、從來ノ株式條例ヲ廢シ
テ、新ニ株式取引所條例ヲ制定スルニ至レリ、
之レ亦米商會所條例ト等シク、屢次改正ヲ行ハ
レテ二十六年ニ至ル迄繼續セリ。

此條例ニ依ル株式會社組織ハ大體ニ於テ米商
會所條例ニ於ケルト異ナル所ナキヲ以テ贅言ヲ
要セズト雖モ、茲ニ一ノ最モ注意ヲ值スルハ、

此條例ニ於テ初メテ有限責任及ビ無限責任ノ文
字ヲ使用シ、且其意義ヲ明ニシタルコトナリ、
卽チ同條例第一章第五條ニ依レバ創立證書中ニ
株主ノ責任ノ有限ナルヤ、或ハ無限ナルヤヲ明
記スルコトヲ必要トスルモノニシテ、有限無限
ノ意義ハ左ノ如シ。

有限責任トハ負債償却ノ義務ニ於テ該取引
所ノ株券限り或ハ株券ノ二倍等其限アルヲ云
ヒ無限責任トハ株主一同相連帶シテ各自ノ資
力ヲ竭スニ至ルヲイフ

故ニ其有限責任ハ株金有限及ビ保證有限ノ二
種ヲ總稱スル廣義ノ有限責任ニシテ、此條例ニ
依リテ直ニ設立セラレタル東京株式取引所ノ如
キハ株金倍額ノ保證有有限責任ノ組織ニ依リテ成
レルモノナリ、元來有限責任ノ實質ハ國立銀行
條例ニ於テモ既ニ存在シ居タリト雖モ、之ヲ現
ハスニ適切ノ文字ヲ用ヒテ以テ株式會社組織ノ
特質ヲ最モヨク發輝シタルモノトシテハ、此株

式取引所條例ヲ以テ嚆矢ト爲サルベカラズ。

第三節 一般ノ會社ニ關スル政策

一 設立ノ認可及ビ經營ノ自由 明治初年會社制度ノ輸入ヨリ、二十六年會社法ノ實施ニ至ル迄ノ間ハ、會社組織ニ對スル國家ノ政策ハ未ダ一定ノ方針ヲ有セザリキ、唯國立銀行及ビ取引所ニ付イテハ、夙ニ一定ノ準則ヲ設ケ、且三四ノ特許會社ヲ創設シテ株式會社ノ制度ヲ明カニシタルニ止マリ、未ダ廣ク一般ノ事業會社ニ付キテハ何等ノ規定ヲ見ルニ至ラズ、國家ノ態度ハ頗ル曖昧ニシテ、會社ノ取締リ極メテ放漫ナリキ。

イ 會社設立ノ認可 會社法實施以前ニ於テ

ハ、一般ノ會社ノ設立ヲ爲スニ當リテハ、一々官廳ノ認可ヲ經タルモノナリ、即チ發起人ハ定款其他ノ書類ヲ具シテ之レヲ地方官ニ出願シ、地方官ハ更ニ中央ニ於ケル主務官廳ニ稟請シ、其認可ヲ得タルトキハ、地方官ノ名ヲ以テ設立

認可ノ指令ヲ下附シタルナリ、中央ニ於ケル主務官廳ハ、初メ大藏卿ナリシヲ、明治七年一月ヨリハ內務卿ト爲リ、十四年四月以降ハ更ニ變シテ農商務卿ト爲レリ、地方官ノ下附シタル設立認可ノ指令ハ其形式略一定シタリト雖モ、文辭極メテ曖昧ニシテ、或ハ「書面出願ノ趣聞届ク」又ハ「聞置ク」ト爲スアリ、多クハ「追テ一般ノ會社條例制定相成候迄人民相對ニ任セ候義ト可相心得候事」ト爲シタリト雖モ、中ニハ「書面會社申合規則ノ義ハ追テ會社條例設定候迄該會社限リ設置不苦候」ト爲シタルモアリ、嚴格ニ解釋スルトキハ種々ナル疑問ヲ誘發セザルベカラズ。

一般ノ會社ノ設立ニ付キ官廳ノ認可ヲ必要トシタルハ特別ノ規定ニ依ルモノニアラズ、唯初メヨリ一般ニ官許ヲ受クベキモノト看做サレ居タルニ過ギズ、サレバ最初ノ頃ハ何等ノ出願ヲ爲サズシテ、自由ニ之レヲ設立シタルモノノ絶無

ニアラザリシト雖モ、爾來二十有餘年ノ久シキ
皆其定款ノ認可ヲ受クルヲ例トセリ。

■ 經營ノ自由 斯ノ如ク會社ヲ設立スルニ
當リテハ、先ヅ其定款ノ認可ヲ得ザルベカラズ
ト雖モ、設立ノ許可ハ其定款ノ規定ガ公益ニ有
害ナリヤ否ヤニ依リテ決セラル、モノニシテ、
會社ノ内部組織ニ關シ如何ナル法則ヲ規定スル
モ敢ヘテ官廳ノ容喙スル所ニアラズ、サレバ當
時ノ會社組織竝ニ其經營ニ付キテハ、何等ノ標
準モナク、制限モナク、唯發起人ノ隨意ニ所定
スルコトヲ得タルモノニシテ、從テ此點ニ付イ
テハ極メテ不統一タルヲ免レザリシナリ。

二 有限責任ニ關スル疑問ノ解決 凡ソ株式
會社ノ最大特質ハ有限責任ト株券制度トノ二點
ニアリ、然ルニ後者ノ特質ハ初メヨリ了解セラ
レ、株券ノ發行及ビ賣買ハ年ヲ追フテ發達シタ
リト雖モ、前者ノ特質ニ至リテハ、之レガ了解
稍困難ナリキ、而シテ其一般ニ知了セラル、ヤ

却テ有限責任ノ濫用ト爲リ漸ク其弊害ヲ生ジタ
ルヲ以テ、有限責任會社ノ法律上ノ地位ヲ明ニ
スルノ必要ヲ見ルニ至レリ。

1 有限責任ノ疑問 有限責任ニ關スル疑問
ハ、總テノ會社ニ付キテ生ジタルニアラズ、國
立銀行ニアリテハ條例ヲ以テ初メヨリ其責任限
度ヲ株金額ニ止メ、株式取引所及ビ米商會所ニ
アリテモ、各其條例ノ要求ニ依リテ、責任限度
ヲ明ニシ、特許會社ハ亦皆有限責任ナルコトヲ
規定セラレタルヲ以テ、是等ノ會社ニ付キテハ
何等ノ疑問ヲ生ズルノ餘地ナカリシト雖モ、其
他ノ普通ノ會社ニアリテハ、當時未ダ之レヲ定
ムル條例ナカリキ、然ルニ諸會社ハ定款又ハ申
合規則ニ於テ其有限責任ナルコトヲ記載スルモ
ノ多ク、其稱號ニ「有限」又ハ「有限責任」ノ文字
ヲ冠スルモノスラ少ナカラザリキ、而シテ官廳
ハ其儘會社ノ設立ヲ認可シ、敢ヘテ責任問題ニ
付キテ干涉スル所ナカリキ、サレバ株主ノ側ニ

於テハ官廳ノ設立認許ハ同時ニ有限责任ノ認許ニ外ナラズ、從テ會社ハ之レニヨリテ國立銀行ト同様ノ有限责任會社ト爲リタルモノト思惟シテ、盛ンニ其設立ニ從ヒタルナリ。

■ 疑問ノ解決 然ルニ法律思想ノ漸ク普及スルニ伴ヒ、所謂有限责任ナルモノ、性質ニ關シテ種々ナル疑問ヲ生ジ、遂ニ明治十五六年ノ頃ニ至リ、其法律上ノ性質ヲ確定スルニ至レリ而シテ其解釋ニ依ルトキハ、有限责任會社ハ無限責任會社ニ比シ、社會上經濟上ニ重大ナル影響ヲ及ボスモノナルガ故ニ、國家ノ定メタル會社條例ニ依ルニ非ザレバ有效ニ設立スルコトヲ得ザルモノトス、然ルニ從來我國ニ於テハ未ダ會社條例存セザルガ故ニ斯カル有限责任會社モ亦存セズ、地方官ノ設立免許ノ場合ハ株主相互ガ其定メタル結社契約ニ依リテ會社ヲ組織スルコトヲ許シタルノミニシテ、一般世間ニ對シテ效力ヲ有スル有限责任會社ノ設立ヲ許可セラレ

タルニアラズト爲シ、從テ會社ノ外部ニ對スル關係ニ付イテハ、一般契約ノ原理ニ從フベキモノニシテ、其會社ノ有限责任ヲ承認シテ取引シタル者、又ハ承認シ得ベキ理由アリタル相手方ニ對シテハ、有限责任ノ效力ヲ有スト雖モ、然ラザル者ニ對シテハ假令定款ニ有限责任ヲ規定シタル場合ニ於テモ、尙ホ無限責任ヲ負擔セザルベカラザルコト、爲シタリ、明治十九年三月福島縣ヨリノ伺ニ對スル司法省ノ指令ニ曰ク

無限ノ定メアル時ハ勿論有限ノ定メアルトキト雖モ債主ノ之レヲ知リタル證據アルカ若ハ之レヲ知リタルト看做スベキ事由アル時ノ外總テ株主ノ資産ニマデ其責任ヲ及ボスヘキモノトス。

ハ 解決ノ效果 商法實施前ノ會社ノ責任限度ハ斯クノ如クニシテ確定セラレ、從來ノ自稱有限责任會社ハ多クハ實際上無限責任會社トナリ株主ハ大ニ失望セリ、然リ彼等ハ大ニ失望セリ、蓋シ彼等ガ地方官ノ免許ヲ以テ完全ナル有限责任會社ノ設立ヲ認メタルモノト爲スニハ

相當ノ理由アリ、而カモ之レヲ否定シテ以上ノ如キ解釋ヲ取ルニ至リシハ、後年法律思想普及ノ結果ニシテ政府ガ最初ヨリ取り來レル政策ニアラザレバナリ、株主ニ相當ノ理由アリトイフ所以ハ他ナシ、元來會社ノ設立ヲ免許スルニ當リテハ其定款ノ條項ヲ檢査シ、弊害ナキヲ認メタル後ニ於テ初メテ指令ヲ與ヘタルモノナルガ故ニ、設立ノ免許ハ同時ニ定款ノ免許ニ外ナラズ、即チ定款ノ條項タル有限責任ノ規定モ亦認許シタリト解スルハ背理ニアラズ、然ルニ有限責任トイフ事ハ連帶責任ト異ナリテ、其性質上對内的ノモノニ非ズシテ對外的ノモノナリ、會社ガ其債權者ニ對スル關係ヲ明カニスル爲メニ設ケタル規定ナリ、サレバ有限責任ノ條項ヲ含メル定款ヲ認許スルハ、之レヤガテ會社ガ有限責任ヲ以テ營業スルコトヲ認許シタルニ外ナラズト解釋シ得ベケレバナリ、若シ然ラズンバ有限責任ノ條項ヲ免許スルハ理由ナキコト、爲ル

有限責任ノ性質ニ關スル政府ノ解釋ハ一時大イニ株主ヲ失望セシメタリト雖モ、泡沫會社ノ濫興ヲ防止スルニ於テハ遂ニ何等ノ效力ヲ有セザリシハ、彼ノ明治二十年前後ノ興業熱ニ徴シテ明カナリ、之レニハ二箇ノ理由アリ、一ハ取引上有限責任ナルコトヲ表示スルトキハ、有限責任會社ノ實質ヲ持チ得ルガ故ニシテ、二ハ當時別ニ之レニ代ハルベキ會社組織ノ存セザリシニヨルナリ。

三 會社ノ法人格ノ疑問 出資者ト離レテ獨立ノ人格ヲ有スルコトハ會社組織ニ必要ナル條件ニシテ其組合ト異ナル所以モ亦此點ニアリ、彼ノ國立銀行、取引所及ビ特許會社ノ如キ特殊ノ會社ニ付キテハ、其ノ法人格ニ關スル特別ノ明文ヲ存セズ、又代表者タル役員ノ人物ニモ重キヲ置キタリト雖モ、其獨立ノ人格ヲ認メ居タルコトハ、條例其他ノ規定ニ依リテ疑フベカラズ、實際ノ取扱モ亦斯クノ如クナリキ、然ルニ

普通ノ會社ニ對シテハ、甚ダ漠然タルモノナリ
シト雖モ特ニ獨立ノ人格ヲ與フル旨ノ規定ヲ存
セザリシガ故ニ商法施行前ノ會社ハ嚴格ナル意
味ニ於テハ法人ニ非ザリシナリ、然レドモ其實
際ノ行動ニ於テハ獨立ノ人格者ト全ク同様ノ地
位ヲ有シ、會社ハ其代表者ヲ通ジテ自ラ訴訟ノ
當事者ト爲リ、又其役員ノ爲ス法律行爲ハ會社
タル獨立人ノ行爲ナリト看做サレタルコト今日
ト殆ンド選ブ所ナカリキ。(未完)

價格新論 (其四)

松浦 要

目次

六、從來ノ價格說ノ批評——(一)限界ノ思想ヲ用ヒザル

モノ、ワグナー、フォン・ノイマン、レキシス、フォン・

シュモラー——(二)限界ノ思想ヲ誤リテ適用セシモノ

(奧太利派ノ限界價值說)メンガー、フォン・ボエームバ

ヴェルク、フォン・フネリッホウヰツ、——「豫期」及ビ

「平準」資本利潤

六 從來ノ價格說ノ批評

價格ノ成立ニ關スル吾人ノ說ハ一見自明ノ理
ノ如ク、讀者ノ多クハ何等考慮スル所ナク以上
ノ說ト從來行ハレシ說及ビ經濟書中謂フ所ノモ
ノトノ差異ニ就キ、本論ノ價值ヲ全然認メザル
ベシ。故ニ研究ヲ進ムルニ先ダチ吾人ノ得シ結
果ト從來所謂價格構成說トヲ對立比較スルハ蓋
シ無用ノ業ニ非ザルベシ。然レドモ餘リニ廣大
ニ失セザランガ爲メ茲ニハ最近ノ學說ニ就テノ
ミ見ル所アラントス。

價格ニ對スル吾人ノ說ハ三箇ノ思想ヨリナル
一般收益ノ概念、之レニ適用セラル、限界ノ思
想及ビ限界收益ニ適用セラル、均等ノ思想之レ
ナリ。此ノ中收益ノ思想ハ未ダ之レヲ見ズ、限
界ノ思想ハ頗ル多ク用ヒラレ、均等ノ思想亦採
用セラレシト雖モ甚ダ不完全ノモノニシテ全ク
量的タルヲ免レズ、而モ何レモ收益ノ概念ニ適
用セラレシコトナシ。茲ニ於テカ子ノ唱ヘシ新